

**Translations of Three Poems by Yamasaki Kayoko:  
'Tree' 'The Hour-glass' and 'Coming Home for a Brief Visit'**

**Introduction by Rina Kikuchi<sup>1</sup>  
Translated by Rina Kikuchi and Subhash Jaireth<sup>2</sup>**



3

---

\* This working paper is a part of joint research KAKENHI (Grants-in-Aid for Scientific Research) 15KK0049.

<sup>1</sup> Faculty of Economics, Shiga University. [http://researchers.shiga-u.ac.jp/html/100002503\\_en.html](http://researchers.shiga-u.ac.jp/html/100002503_en.html)

Contact:kikuchi@biwako.shiga-u.ac.jp

<sup>2</sup> Adjunct Associate Professor, CCCR, University of Canberra, Contact: subhash.jaireth@canberra.edu.au

<sup>3</sup> The cover image of Yamasaki Kayoko's poetry collection, *For the Birds* (『鳥のために』).

# CONTENTS

## Introduction

山崎佳代子詩三篇の英訳について

## Poems

Tree

木

The Hour-glass

砂時計

Coming Home for a Brief Visit

一時帰国

## Translators' Notes

# Introduction

This is one of the outcomes of my translation project with the poets based in Australia. This project is a co-translation book project, which involves seven poets, translating contemporary women's poetry written in Japanese, for a bilingual anthology. The aim of this project has been to translate or transform poems originally written in Japanese into poems that live and breathe as poems in English. As the only native Japanese speaker on the translating side of this project, I tried to bridge poets who write in Japanese and poets who write in English, often becoming a messenger between the poets in order to transform the poem from Japanese to English.

Subash Jaireth is a poet, who has published poetry, plays, fiction and nonfiction in Hindi, Russian and English. He has been living in Canberra for the last two decades, but originally from India. He was born in a small town, Khanna, then studied geology in Moscow, where he lived for a decade. He worked as a geologist at the University of Roorkee, India, before he came to Australia in 1986. He has a PhD in Russian drama (ANU), and has published three collections of poetry; *Before the Bullet Hit Me* (Vani Prakashan, Delhi, in Hindi, 1994); *Unfinished Poems for Your Violin* (Penguin Australia, in English, 1996); *Yashodhara: Six Seasons without You* (Wild Peony, in English, 2003).

Because of his multilingual background, and also his Slavic background, I have matched him with Yamasaki Kayoko, a poet, who write in Japanese and Serbian, who has been living and teaching in Belgrade for the last two decades. I am most grateful for both Kayoko and Subhash, for their poetic insight. They have taught me so much, through their poetry and the act of translation, about the live between two homes, two languages and two cultures.

Rina Kikuchi

# 山崎佳代子詩三篇の英訳について

本翻訳は、近現代女性詩研究の一環として、2016年12月に在外研究先のオーストラリア・キャンベラにて立ち上げた「詩人による詩の翻訳プロジェクト」の一部である。本プロジェクトは、詩を他言語に＜詩として＞移行する方法を探求することを目的とし、キャンベラとその周辺に住む英語詩人らの協力を得て、日本語詩を英語詩として移行することを試みたものである。

英語詩として、英語圏にて、日本語詩からの英訳詩を発表するとき、詩にしたしみのない読者は「日本らしい」「日本の詩」を期待することが多い。しかしいったい「日本らしい」詩とはどういったものをさすものなのか。短歌や俳句のような短いもの、あるいは「わび・さび」といったイメージが、英語圏で想定されている「日本らしい詩」の要素であろうが、日本語現代詩にはほとんどまったくそのような要素はみられない。

さらに、日本国内でも国外でも、日本に住む＜日本人＞の詩人が日本語で書く作品、それが日本語詩だと考えられがちだが、これでは「定義に合わない」現代日本語詩が続出する。たとえば、アイヌや琉球に関する日本語詩。方言で書かれた詩。在日朝鮮韓国人が日本語で書く詩。あるいは、海外に移住した日本語母語者が日本語あるいは外国語で書く詩。または、外国語を母語にする人が、日本語で詩を書く場合。＜日本語＞とはなにか、＜日本人＞とはなにかを考えなければ、「日本の詩」とはなにか、説明できない。これらの問題の解決策として「日本語詩」「日本語詩人」あるいは「日本語文学」という表現が使われることもあるが、まだまだ十分に浸透しているとはいえず、さらに「日本語詩」も英語に訳してしまえば「Japanese Poetry」となるわけで、「Japanese Poetry」が「日本語の詩」なのか「日本の人が書いた詩」なのかは曖昧になる。

山崎佳代子氏の詩の英訳を試みたのは、「日本の詩」とはなにかということ、作品を通して考えるきっかけになれば、と思ったからである。セルビア・ベオグラードに20年以上暮らし、自身の日本語詩をセルビア語訳で発表する山崎氏。セルビア語の作品を日本語に訳し、難民キャンプで詩のワークショップをおこない、内戦と空爆をセルビアの人々とともに生き抜いた＜日本の＞詩人。山崎氏は、さまざまな意味で、＜日本の詩人＞のイメージを打破する詩人だ。そして、このような体験のもとに成り立つ彼女の詩は、よい意味で「日本らしさ」をうらぎる詩になっている。

共訳作業には、インド生まれで、大学時代からの10年をロシアで学び、インドの大学で地学を教えた後、この30年をオーストラリアで暮らす詩人、サバシュ・ジャイレス氏にご協力いただいた。ジャイレス氏は、英語とヒンズー語とロシア語とで詩を書く。多言語で生きる詩人だからか、翻訳に強い関心を持つ。セルビアを背景にした山崎氏の詩作品、そして、日本語とセルビア語の間でゆれる山崎氏の詩世界に、ジャイレス氏は深く共感した。また、山崎氏の第二言語にあたるセルビア語は、ロシア語にちかい。ふたりの間では、セルビア語とロシア語で会話が成り立つ。ジャイレス氏は、私による英語での説明だけではなく、山崎氏のセルビア語訳の詩を読みながら、山崎佳代子詩の世界への理解を深めた。

私は、山崎氏とジャイレス氏というふたりの詩人と相談しながら、翻訳する詩を選んだ。山崎氏の詩の特徴がいきている、タイプの違う詩を選ぼう、というジャイレス氏の意見を受け、山崎佳代子詩の特徴であると私が感じた三つの要素をいかした詩を選んだ。

「木」はセルビアの内戦が舞台の詩。これは、山崎氏の初期の作品であるが、このような詩が、日本語で＜日本の＞詩人によって書かれていることに衝撃を受ける。山崎氏の初期の作品には、内戦、戦争時にあらわになる人間の暴力性と残忍さがあらわれる詩作品がいくつもある。「砂時計」も同じように不穏な空気を持つ初期の作品であるが、この詩はさらに哲学的でもある。このような思想的・哲学的な詩も、山崎氏の詩の持つ特徴だ。そして、日本語とセルビア語というふたつの言語の間、ふたつの故郷（日本とセルビア）の間にゆれるアイデンティティという、山崎佳代子詩がもつ大きな特徴をあらわす詩として、「一時帰国」を選んだ。それぞれの詩から、山崎佳代子詩の世界の一端が伝われば幸いである。

日本語詩を英語詩に＜移行＞するとき、あるいは、日本語詩を英語詩に＜生みかえる・生みなおす＞ときに生じる、文法上の基本的問題がある。私が考える大きな基本的な問題点は三つだ。ひとつは、日本語詩では主語・人称代名詞・目的語が（意図的に）省略されることが多いこと。ふたつめは、日本語には単数・複数の違いが明確にはないこと。みつめは、日本語では時制が流動的なこと。これらは通常の会話や文章でもみられるが、詩人が意図的にこれらの曖昧さを利用して詩の世界をひろげていることが、英語訳にするときのおもしろさと苦勞とにつながる、と私は感じている。その他、冠詞がない、オノマトペが多いなどの問題もあるが、これらについては、英語圏詩人たちはそれぞれにすばらしい英語訳を見つけていた。詩人の創造力と想像力がなせる業だろう。

具体例をあげたい。「木」というシンプルなタイトル。これは単数か複数か。「私は木になつた、という第一行から、「私」である女性が「木」だとわかるので、これは単数であろう。では、これは a tree なのか、the tree なのか、はたまた Tree なのか。このようにして、ひとつの単純にみえる単語でさえも、簡単に英語詩として「移行」できない。常にいくつもの選択肢があり、完璧な翻訳などありえないことを痛感する。これが、翻訳の苦しみでもあり、楽しみでもあるのだろう。

複数、単数の問題は、「木」だけではなく、詩中に登場する「男」にも関連する。この詩では最後に「女たち」と複数形が使われるのに対し、「男」は常に「男」であり「男たち」として登場しないことから、「木」である「私」のところにやってくる男はひとりである、と想定して英語訳に反映させた。

「砂時計」では、詩中で繰り返される「さらさら」というオノマトペを「soft, like so」と訳した。「さらさら」というのは、ここでは、砂時計の砂がとめどなく落ちていく様子と音をあらわしている。英和大辞典では「rustling, smoothly, lightly, quietly, softly」などが候補として挙がる。Softly and smoothly あたりの組み合わせが、詩を朗読したときの音としても好ましい。ジャイレズ氏は英訳の音を「さらさら」という日本語の音に近づけたいとし、最終的に soft, like so に決めた。研究者にはこのような創造性がある英訳はなかなかできない。字面と意味に気を取られすぎるせいだろう。

英語訳では主語や人称代名詞が文法上不可欠になるため、日本語詩よりも長くなりがちであるが、ジャイレズ氏は音と語句の並び（ページ上の文字の配列）も原詩に近づけたいという思いが強く、それらの特徴がいきた訳にしあがった。

「一時帰国」で最も苦勞したのは、第一連である。「家々のたたずまい」の「たたずまい」とはなにか。「人々の立ち居ふるまい」の「立ち居ふるまい」とはなにか。また、第二連の「どよめき」と「ざわめき」の違いはなんであるか。これらを英語で説明し、かつ英語で表現することに四苦八苦した。「たたずまい」も「立ち居ふるまい」も英語では、「あること」「いること」「動き」を意味し、つまりそれは「存在していること」ということになる。存在している、ということは「わざわざ詩のなかで説明する必要はない」ということになり、結果として、どちらも英語では消えている。代わりに、house after house, face after face と単語を繰り返すことによって、家々が、人々が、そこに存在していること、それらがそこにあることを強調した。house after house, face after face, look and look, という繰り返される単語が続く三行で、街並みにつづく家という家を、まわりにいる人という人を、ずっとずっと見続けていたい、という第一連におけるイメージと感情

が、英語に移行できたのではないか、と思う。簡潔な三行にまとめることも、重要だと考えた。日本語詩でもそうであるように、英語詩でもリズムが非常に重要になるので、リズムにも配慮した。

山崎佳代子氏は自作をセルビア語に訳す翻訳家でもあることから、詩の翻訳者としての大先輩にあたります。翻訳についてたくさんのおアドバイス、ご教授をいただいたこと、ここに心からお礼申し上げます。これらの英訳はジャイレズ氏と菊地の共訳であると同時に、原作者含む三人の共訳作業のようでもあると思っています。訳詩の作業を通して、ふたりの詩人の、詩に真摯にむかいあう心と、詩の翻訳の心構えに接することができ、山崎佳代子詩の翻訳は、私にとってかけがえのない貴重な体験となりました。お二人の詩人のご協力はもちろん、お二人に巡り合えたことに心から感謝しています。

2017年11月 バラの花咲くキャンベラにて  
菊地利奈





## 木

しらぬまに異郷で 私は木になっていた  
鳥も巢を掛けず実も葉もつけぬから  
私には名前がない

血のまじる雲間を旋回する鳥に  
国境の噂を聞くばかり  
黒緑の皮に覆われ顔を失ったが

男に枝を一本払われ 傷は腫になった  
残る一本の枝で雲を払いのけようと  
悶えるばかり

次に 男が村に来る日  
根元から切り倒されるだろう  
私のマルタが乾かぬうちに

職人に 兵士を葬る棺を作らせ  
釘を打たせ蓋をさせる  
私の板はまだ温かい頑丈な体を抱かされ

地に埋められ  
私の木切れは 村人の肢体と一緒に  
穴に投げ込まれ火を放たれ

私の木屑は灰になり  
雲を舞い 泣くだろう  
部隊は正しい呼吸のように村を訪れ

少女の臀部がやっと乗るほどの  
私の切り株に  
鶏の首が乗せられると

鉦は振り下ろされ  
草原を首なし鶏が跳ね回る  
肩の小さな少年も捕えられ

柔らかな栗毛の頭が乗せられ  
鉦が振り下ろされる  
妹が泣きじゃくり母が気絶しても

男は腹を抱え笑い声をたて  
油じみた熱い目を潤ませ  
女たちの体を鍋に投げ入れ

## Tree

unbeknown to me I became a tree in this alien land  
a tree without a nest for birds, without fruits or leaves  
I remain uncalled unnamed

over me hang the blood-stained clouds and a raven lost in flight  
I hear only rumours of the happenings at the borders  
my skin has blackened, my face is disfigured but then

a man hacks off a branch leaving a scar shaped like an eye  
now I have but one branch with which I fend off clouds  
it hurts each time I swing the branch

soon the man will return  
to slash at my roots and grind my stump  
and before it has even dried

the village carpenter will measure a casket for a soldier  
his body still warm neatly placed inside  
the lid nailed and the body engulfed by my wooden embrace

interned in the ground we'll remain  
when the remnants of wood and the body  
will be gathered in a hall and set alight

the wood will turn into ashes  
twirling with the clouds weeping and wailing  
meanwhile soldiers marching in step will enter the village again

and on my sliced stump barely  
the size of a little girl's  
soft buttock the heads of chooks will be placed

the hatchet will swing down  
again and again and I'll see headless chooks hopping in the field  
and amongst them a little boy of slender shoulders

his head donned with silky chestnut hair too will find a place  
on the stump and the hatchet will swing down  
drowning the cries of his sister as her ashen-faced mother will collapse

but the man, now dressed as a soldier, his hands on his hips  
will roar a shameless laugh his reddened eyes watering from the effort  
before he will throw her and other dead women in his devil's

酒を食らうばかりだ  
私の切り株は血に染まるだろう  
鳥の肉の気配に舞い降りる

こびりついた血のせいで  
年輪が読み取れない  
切り株には待つことだけが許される

水盤となる朝を  
雨に満たされた水面が  
鳥の影を映す朝を

『鳥のために』（復刊 2008 年版、pp.36-41、初版 1995 年書肆山田）

cauldron and will drink and drink as my stump  
will be drenched in blood of the dead and then  
the raven will descend to land near the stump smelling of flesh

and look at the trunk soaked with blood  
unable to read in the smeared rings my age  
and so I'll wait the chopped down trunk of a tree

wait for the morning to turn into a stoup  
filled to the brim with rain water  
wishing for the raven to come look and leave its fleeting image.

*Poet to Poet: Contemporary Women Poets from Japan* (Recent Work Press, 20187),

pp.225, 227&229.

## 砂時計

さらさらと落ちてゆく 私たちは砂だ  
形状、重量ともに均質 色はどれも鳩の  
かぼそい足の 薄紅色だ

天国と地獄は 透きとおったガラスの  
皮膜に被われて 形よい身体の中央に  
作られた窪みで 隔てられている

さらさらと落ちてゆき 最後の砂が  
窪みを 滑り落ちてしまうと 命のない  
空っぽの天国が残る

その瞬間に 診療室は緊張する  
私たちの下降に意味があるのはその時だけだ  
地獄に留まった後の 私たちの沈黙に

もう だれも興味をしめさない  
室に漂う埃を被って  
長い沈黙が続く季節もあるが

再び あの男が降り向いて  
器を覆すと、一度に 天国と地獄が  
逆さになって

さらさらと 私たちは、限られた天国の  
時間を刻み始める ガラスの中に  
閉ざされた地獄への 落下時間を

さらさらと落ちてゆく 私たちは砂だ

## **The Hour-Glass**

soft, like so it falls we are but sand  
grains as light or heavy coloured  
pale red of a pigeon's scrawny leg

the heaven the hell are both glass  
see-through shapely and in the middle  
a pinched neck separating the bulbs

soft, like so drops the last grain  
through the neck leaving the  
heaven empty hollow alone

meanwhile in the surgery the air  
is edgy we have meaning only when we flow  
to stop is hell hushed and silent

oblivious the hour-glass  
in the surgery gathers dust  
the silence floats through the seasons but

then the surgeon's hand turns over  
the hour-glass just like that reversing  
the heaven and the hell

soft, like so we fall again  
the time ticks in the hour-glass  
to lodge us in hell the time drops

soft, like so, we fall the grains of sand.

## 一時帰国

家々のたたずまい  
人々の立ち居ふるまい  
それをただ眺めていたかった

母語のどよめき  
声と声の重なりあい  
午後の電車が乗せて走る  
人々のざわめき  
どんより疲れた顔、はずんだ表情  
秋のおわりの黄金色や紅色  
光と影のまじわりに  
酩酊し

祭りの晩  
風の盆おどりを  
訪ねてやって来た  
旅の人のように  
みずからは  
踊らず歌わず  
踊りの輪を  
遠くから  
眺めるように

通りすがりの者の眼で  
私は見つめる  
私のものでありながら  
もはや私のもの  
ではない  
母の国  
の表情を

## Coming Home for a Brief Visit

House after house  
Face after face  
I want to look and look

Hearing my mother's tongue  
I'm baffled by the cacophony  
In the afternoon train  
I see a restless crowd  
some appear tired others cheery  
the autumn outside is amber and red  
a play of light and shadows  
dazed I feel dizzy

In the evening  
at the *bon-matsuri*  
I feel like a stranger  
on a visit  
alone  
unable to join  
the dancers in the circle  
as I watch  
from a distance

like a passer-by  
I gaze  
at the face  
of my motherland  
mine and yet  
nevermore  
mine



# Translators' Notes:

## **Coming Home for a Brief Visit**

*Bon-matsuri* is a traditional village festival, held all over Japan, in *bon* season (around August 15th). It is a season in which the souls of the dead return home, and each household welcomes their return. At *bon-matsuri*, villagers come together for a circle dance ritual.